



社会福祉法人 聖隷福祉事業団
医療保護施設・地域医療支援病院

総合病院 聖隷三方原病院

SEIREI MIKATAHARA GENERAL HOSPITAL

おおぞら

第208号

2022年5月1日発行

発行責任者 荻野和功

編集者 木部哲也

<http://www.seirei.or.jp/mikatahara/oozora/>

「ひかりの子」の発達支援

所長 木部 哲也

児童発達支援センター「ひかりの子」では毎年3月に卒園式があります。コロナ禍前までは園児とご家族に集まっていたいただきお祝いさせていただきました。式ではご家族から一言ずつお言葉をいただきますが、最初は泣いてばかりいた子どもたちもそれぞれ逞しくなり、表情の変化や成長に驚かれたと話されるご家族もよくいらつしゃいます。様々な思いの詰まったお話を聞くことができ、職員にとってもやりがいを感じる瞬間です。

ひかりの子で過ごす幼児期は、子どもの発達過程において、最も変化の大きな時期です。明和政子著「ヒトの発達の謎を解くー胎児期から人類の未来まで」(ちくま新書)には、ヒトの発達の本質について、自分の身体を、他者をはじめとする環境と相互作用を繰り返しながら連続的に脳と心を発達させていくこと(連続性)、その発達軌跡は環境

によって多様となり得ること(多様性)、脳が環境から影響を受けて変化しやすい特別の時期があり(発達の感受性期)、その時期に多様性が生じやすい、そして身体が環境に主体的に関わる過程で膨大な情報が身体というフィルターを通して選択され、構造化されるという考え方を「身体性」といい、発達初期に他者と自分の身体を接触させる社会的な経験は、後の発達を左右する重要なものである、としています。

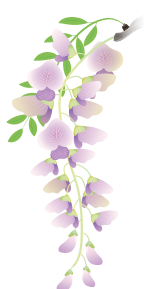
また、ヒトには三つの身体感覚、すなわち、自分の身体の内部状態の変化を感じる「内受容感覚」(内臓感覚、自分の身体の動きを感じさせる筋・骨格系、平衡感覚からなる「自己受容感覚」、そして環境から得る感覚(視覚・聴覚・嗅覚・味覚)の「外受容感覚」があり、これらの関係が統一的に安定した形で感じられることが、自己を意識す

るために重要であり、そこに深く関与する脳の仕組みとして、環境と自己の状態を脳内で「予測・照合・誤差修正」する神経系システム、すなわち「内部モデル」を持つているとしています。例として、乳児は、抱かれ、授乳されると身体内部に心地よい変化を感じる(内受容感覚)と同時に、目を見つめられ、多様な表情変化を見せられ、声をかけられながら養育者のおいを感じる(外受容感覚)を経験を通じて内受容感覚と外受容感覚の統合が促進し、主観的に自己の感情に気づくことのできる発達の基盤となるとしています。

ひかりの子では、いろいろな音を聞いたり、おもちゃに触ったり、見る経験などを通して「自ら注意を向け働きかけること」、「意欲をもつこと」、「期待すること」などの表出が見られれば、そのことが満足感、達成感を引き出し、成長発達へとつながると考えています。これは、「予測・照合・誤差修正」という内部モデルを意識した考え方も言えます。また、子どもは「人と人との関わり合い(触れ合い)」を経験

することで成長するものだと思います。この考え方は発達の「身体性」を意識した支援になります。職員との関わり(一定の予測内に納まる存在ともいえます)だけでなく、自分のすぐ近くにいた子どもからの影響(時に予測を大きく超えることもある存在)がとても大きく、「お互いの距離が縮む感覚」つまり「自分の体を通じて他者と触れ合う感覚」がとても大切であると思います。ひかりの子では引き続きこうした考えのもとで発達支援を心がけていきます。

ところで、先の著によると、触れあいの経験を重ねていくことで、子どもだけでなく、養育者の側の脳と心にも柔軟に変化が生じることも分かってきているようです。園児の「満面の笑み」や「真剣な表情」、「活発に活動している様子」に触れることで、私たち自身が力をもっている感覚になるのもそういった脳の変化によるのかもしれない。



「聖隷おおぞら療育センター」 入所ゾーン再編成に向けて

看護部課長兼 副所長 沖村 宏美

はじめまして私は沖村宏美と申します。私は2021年4月に聖隷三方原病院、よろず相談地域支援室内の看護相談室から異動して参りました。それまでは、利用者さん支援という立場から「おおぞら療育センター」に関わらせて頂いておりました。異動後は利用者さんの療養生活を守ることを看護の視点でスタッフと共に展開してきました。そして、2022年1月には副所長という大きな役割を頂くこととなりました。重症心身障害児者の方への看護は急性期病院での経験しかなく、この年にして未熟な私ですが、どうぞよろしくお願ひします。

異動し1年の私ですが、今回は、2022年度4月に予定されている、入所ゾーン再編成についてお話しをしたいと思います。まず、なぜ入所ゾーン再編成が必要になったかをお伝えしたいと思います。一つ目は、利用者さんの障害像の変化です。数年前に比べ医療的ケアが必要な利用者さんが増えており、加えて医療も複雑化しています。また、利用者さんが生涯を過ごす施設ですので、利用者さんの年齢も上がり、加齢にともなう食事や入浴の介助方法の変更等、生活支援内容の変更が必要になってきています。一つ目は生活環境の整備の必要性です。利用者さんが、安全に安心して療養生活を送ることができる環境を整えること、例えば、電動ベッドや介浴槽の導入等の検討が必要になっていきます。そして、利用者さん一人一人の個性を大切に支援しているスタッフの労働環境も整えるためにも今回、整備が必要と考えました。

入所ゾーン再編成にあたっては2021年6月より検討会を開催し、木部所長、田口副所長をはじめ、各号館看護課長、生活支援課課長補佐、リハビリテーション部、栄養課、CE室、おおぞら事務、医事課、医療情報課、施設課、薬剤部等多くの部署の方に入って頂きながら検討を重ね慎重に進めてきました。

今回の入所ゾーン再編成では、利用者さんの半数ほどがゾーンを移動することになります。利用者さんやご家族の方々には、本當にご心配やご迷惑をお掛けすることとなりません。また、再編成後には利用者さんもスタッフも環境に慣れないことから双方の緊張が続くことも予測していません。しかし、その先には利用者さんの個々の特性に応じた支援や生活環境が提供できると考えています。どうぞ今後のおおぞら療育センターのために、ご理解のほどよろしくお願ひします。

私たち、聖隷おおぞら療育センターのスタッフは、利用者さんの障害像や医療必要度に適した生活環境整備の問題解決のために、2022年4月に入所ゾーン再編成を決定させて頂きました。

それにより利用者さんに

対して、よりよい支援（おおぞらしさ）につなげられるように、スタッフ一同、力を合わせて頑張っていますので、今後ともよろしくお願ひします。



Aさんは、カラーボールを見つけると、手の甲で払うようにして転がしたり、掴んでポイツと投げたりします。そんな時、Bさんがボールを投げるようなジェスチャーをしながら「やーっ」と声を出すと、Aさんの表情がパッと明るくなり、Bさんに顔を向けてニコリと笑います。職員が「Bさんも一緒にやりますか？」とボールを渡すと、「やーっ」とAさんに向けて投げます。Aさんは、とても嬉しそうにニコニコしながら自分の所にきたボールを掴み、「あ、あ」と言って手を伸ばしてBさんに差し出していました。何となくやっていたボール遊びが、Bさんの声掛けにより外に向き、ボールを介しての関



わりへと発展しました。そんな日常生活の場面から、相手を意識してボールをやりとりする事を、Aさんの日中活動として取り入れました。段ボールで1.5m程のレーンを作り、その中でボールの転がし合いができるようにしました。途中でボールが止まると、体と手を目一杯伸ばして手の甲で払って転がし、相手に届くとニコリと嬉しそうに笑います。今度は、自分に向かってくるボールの動きをじっくりと見て、手を伸ばして掴んでニコリ。そして、相手に向けてポイツと投げたボールの行方を、にこやかに見つめ、相手に届くと満面の笑みになります。ボールを渡したいという思いと、受け取って嬉しいという思い

で、何度も転がし合いました。相手とやりとりする事で心が動かされ、気持ちが高まっていくのを感じました。

後日、ボールを転がすレーンに穴を開け、そこでボール転がしをしました。途中で穴にポトツと落ちて無くなると、「えっ？」と

少し驚いたような表情で職員を見た後、おかしそうに笑っていました。そこから、意外性を楽しむ活動として、『ひげじいさん

アレンジバージョン』の手遊びを行いました。「とんとんとんひげじいさん」と通常の手の動きの後、少し間をおき「モジョモジョモジョモジョ」と言

いながら指を動かすと、目を大きくあけて職員の顔を見ます。それから見る目の力が強くなり、ぐっと注目

しています。次の「とんとんとんとんこぶじいさん」「ポロンポロン」で、片方ずつゲンコツを頬から離すと、目を細めて楽しそうに

笑い、「てんぐさん ニューリース ポキッ、てめがねさんズリッ」とすすんでいくうちに笑顔

が大きくなっていき、「手はおひざ」で終わると、満足したように微笑んでいました。間があいた後の、擬音語にあわせた手の動きに、意外性や面白さを感じると共に、次を期待して見るといった気持ちの盛り上がりも感じられました。



入所リハビリの現在

齋藤 香保

おおぞらではこれまで外来・通所・入所のリハビリを訓練士全員でおこなっていましたが、コロナ禍となり、感染対策のため外来・通所と入所で担当訓練士を完全に分ける体制となりました。分けた事で担当部門の利用者さんと関わる機会

や職員と情報共有する機会が以前より増え、これまで以上に利用者さんの日常生活に寄り添った働きかけができるようになったと感じます。私の所属する入所リハビリ部門ではここ二年ほど、新たな取り組みを複数進めてきました。今回はその中でも、日常姿勢に関するカンファレンスと呼吸機能評価に焦点を当ててご紹介したいと思います。

まず日常姿勢に関するカンファレンスは、利用者さんが褥瘡や呼吸機能低下などの問題で、これまでの姿勢をとる事が困難になった場合や新たな姿勢のバリエーションを増やしたい場合に実施しています。カンファレンスでは、各職種が評価した利用者さんの状態について情報を共有する事で、より適切な姿勢のとり方やセット方法を提供できるようにになりました。また、職員が安全に目的を理解しながら日常姿勢をとる事ができるよう、写真付きの資料を作成する事もあります。これらの事が、褥瘡の改善や排痰の促進などをより効果的に行う手助けに

なっていると考えます。利用者さんの姿勢やそのセツトについて何か困った事があれば、気軽に声をかけて頂きたいです。



次に呼吸機能評価についてですが、これは普段病院で勤務している呼吸リハビリ専門の理学療法士と連携しておこなっています。利用者さんの呼吸状態と日常で必要とされるケア方法を職員と共有する事や、訓練プログラム・評価方法についておおぞらの訓練士が指導を受ける事が主な内容です。また、昨年夏には呼吸リハビリ専門の理学療法士が中心となり、それぞれの利用者さんについて呼吸機能の評価シートを作成しました。状態に変化があった際に更新して変化を把握し、

必要に応じて日常のケア方法や姿勢・訓練プログラムも再検討しています。呼吸機能の変化は、利用者さんが安全で健やかな生活をする上で今後も見逃ごせないポイントとなると考えているので、私自身も勉強していきたいと思っています。



今回ご紹介した事以外にも、退院指導や摂食嚥下などについて多職種で方向性を検討するカンファレンスへの参加や、家族指導、骨折予防といった取り組みも少しずつ動き出しています。今後も、利用者さんができるだけ快適に安心して暮らせるよう、多職種と密に連携し様々な面からリハビリを進めていきたいと思っておりますので、皆様よろしくお願ひ致します。

新入職員・異動者

12月～3月異動者

1号館：田邊 理香
(看護師)

2号館：奥野 民
(看護師)

2号館：島野 加奈
(看護師)

2号館：原田 遥
(看護師)

3号館：浅野真奈代
(クラーク)

2022年度新入職員・異動者

新入職員

はるか：油井莉里加
(生活支援員)

うらら：佐々木千帆
(生活支援員)

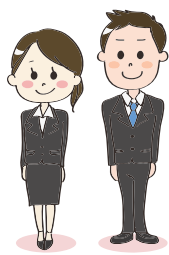
異動者

1号館：白柳美和子
(看護師)

2号館：小出有希子
(看護師)

3号館：植田早慧美
(看護師)

よろしくお祈りします



ひかりの子 卒園式

3月31日、2021年度のひかりの子卒園式を執り行いました。1988年にひかりの子が開設してから34年。昨年までに卒園された方は206名となりました。卒園後もおおぞら療育センターを利用されている方も多く、この時期が来るとひかりの子通園時代を懐かしむご家族もおられるのではないのでしょうか。

今年度は、207番目となる卒園児1名の新たな門出をお祝いしました。卒園式では、参加者全員でピアノ演奏に合わせて「ひかりの子ソング」や「思い出のアルバム」を歌い、笑顔で聴いているAさんの姿を見ることができました。

ここ数年、新型コロナウイルス感染症対策のため、参加者や時間に制限のある卒園式が続いております。卒園児とご家族にとって心に残る卒園式となるよう、今後も工夫していきたいと思っております。



「つまづかない足腰」

こだま 堀野 桂

リレーエッセイ

「おっと」と「平らなところ」でつまづいた。「いてて」階段上がるうとしたらつま先引っかけた。最近、こんなことが増えたなあ。きつと疲れてるんだな。そんなことを考えながらGoogleで検索…あ、「腸腰筋が衰えている」ですって。「腸」、漢字一字だけけど「腸活」からのリレーエッセイつながった(笑)。

腸腰筋というのは上半身と下半身をつなぐ筋肉で、膝やももを引き上げる役割があるようです。これが衰えると体のバランスが悪くなり、腰痛やつまづきの原因になるのですが、腸腰筋を鍛えるにはやはり運動をしなければいけないようです。運動は嫌いですが自転車のペダリングでも鍛えられるということなのでこれならやれそうな気がします。五年前前に聖隷の先輩の勧めもあってスポーツ自転車に乗り始めました。一人でサイクリングすることもありますが、一緒に走ってくれる仲間がいれば、知らない道も教えてくれますし、何より楽しく走ることができそうです。楽しく走って足腰を鍛えることができ、これはつまづかない足腰を作るのにはもってこいの方法ですね。



苦情解決委員会

2021年10月～12月期間中

公表を希望される苦情はありませんでした。

	1月	2月
ショートステイ利用者数 (延べ利用日数)	45人 (200日)	5人 (23日)
放課後デイ利用者数 (延べ利用日数)	19人 (77日)	0人 (0日)
実習者数 (グループ数)	0人 (0グループ)	0人 (0グループ)